

伊那市 官民共創の新しいまちづくり協議会

会議名	第3回 まちなかエリア高度化 WG			
開催日	2024 年 12 月 12 日(木)			
開催時間	開会	18：15	閉会	20：30
開催場所	すまいテラスいな 2 階			
出席者				
協議会・WG メンバー	平賀研也氏、平賀裕子氏、黒河内貴氏、志知貴文氏、鈴木孝之氏、政金裕太氏、細谷啓太氏、土田智氏、瀧内貫氏			
事務局・職員	企画部：織井企画政策課長、有賀企画政策課長補佐、村田新産業技術推進係長、福原新産業技術推進コーディネーター			
関係者	—			
欠席者	—			
議事	1、「流域治水の講義」WG メンバー 2、「まちなかエリアの話を進める前に知っておきたいこと」協議会メンバー 3、1/21 キックオフイベントでの WG ごとのテーマ設定等について			

議事項目	概要	次のステップ
あいさつ	○WG メンバー ・今までのまちなかエリア高度化ワーキンググループの中では、まちなかエリアのこれまでの歩み、今どのような人たちが活動しているかを知り可視化し、マップやテーブルの上に載せ、他の人たちにも見渡せるように整理することが大事ではないかという意見が出された。 ・今日は、このワーキンググループを進めていく参考として、WG メンバーが研究されている流域治水について勉強させていただき、協議会メンバーからは、伊那まちの再生やるじゃん会(以下「やるじゃん会」という。)のこれまでの取組について、1つの具体例としてお聞きする。	
1、「流域治水の講義」WG メンバー		
	○WG メンバー ・流域は、雨が降ってその雨が集まる範囲、治水は、水のリスクと恵みの両方をマネジメントすること。 ・川だけでなく山の尾根まで含んだ流域全体で、水のリスク、恵みの両方をマネジメントする考え方。 ・従来の治水は、川の水を早く集中的に下流へ流すという考え方であったが、気候変動により大雨が多くなったことで、ゆっくり分散的にとどめながら下流	

	に流す方が正しいのではないかと考え方が変わってきた。 ・川沿いの緑地、森林、水田、湿地、まちなかも含んだ全体を対象に治水を考えるのが特徴。 ・2020年の熊本県球磨川の豪雨災害をきっかけに地域共創流域治水プロジェクトに携わっている。 ・このプロジェクトでは、治水によって美しい風景や豊かな自然を守り、それにより生まれる新しい仕事で経済を豊かにし、地域の人たちも一緒に参加できるような治水プロジェクトを行うなど、持続的な地域づくりに繋がる取組を行っている。 ・まちづくりと流域治水は、環境や流域全体を意識しているところ、みんなが集まりイノベーションが生まれる「共創」が必要というところが共通していると思っている。 ・ランドスケープデザインの考え方は、スケールを行ったり来たりするのがすごく特徴的である。どうしても狭い敷地の範囲内で考えてしまいがちだが、引きで見たらどういう環境だろうと考えることは、今回のようなまちづくりでも使えるのではないかな。 ○協議会メンバー ・試行錯誤、実験を続けながらまちづくりをしていくのが望ましいと思う。例えば小水力発電をしたら街灯の電気代がかからないのではないかなとか、そういった実験をしながら実際の暮らしに関する課題に取り組んでいける。ただ話して終わりではなくて、リビングラボ的に試してみることもできればと思う。	
2、「まちなかエリアの話を進める前に知っておきたいこと」協議会メンバー		
中心市街地の歴史	○協議会メンバー ・中心市街地エリアとは伊那市駅を中心に県道沿い南北1.5kmの範囲であり、山寺、坂下、荒井、西町の4区が含まれる。 ・明治時代は、船運の拠点として入舟が栄え、その後、県道の開通、伊那電気鉄道の開通を契機に、高遠から多くの商人が来て商業機能が移転した。 ・1970年代までは上伊那中から人が集まる中心地だった。今の40代～50代の人でも通り町といえおしやれをしていくところだったのではないかな。 ・1974年にアピタ伊那店が開店したのを皮切りに大型店舗の出店が相次ぎ、さらに市役所の移転により飲食店等の空洞化が加速した。	

やるじゃん会	・ 2001 年に空き店舗補助金創設、2003 年にいなっせオープン、2004 年に商工会議所創業塾など対策は取られたが空洞化は止まらなかった。 ・ 2011 年にやるじゃん会が誕生した。 ・ ここ 10 年の間に緩やかな新陳代謝を遂げていることに個人的に感動している。古いお店をどうこうするということだけでなく、どれだけ新陳代謝するかがまちとしてのポイントだと考えており、そのためには普段から関わる人を増やしていくことが大事だと思っている。 ・ やるじゃん会は、商店主が集まってできた組織で、バラ咲く街角委員会、イベント委員会など 8 つの委員会があり 2011 年からずっと活動してきた。 ・ 物の集積地としての商店街では郊外型大型店舗に敵わない、その郊外型大型店舗も Amazon には敵わないという時代にあって、それらとの競争ではなく、情報や地域の価値が集まるコミュニティとしての商店街を作ってきたつもりである。 ・ 「農」では「いなまち朝マルシェ」、「森林」では「ミドリナ委員会」、「学び」では「いなまちたしゅう室」や「伊那まち BASE」ができ、ローカルベンチャーミーティングでは地域情報誌を作成している。 ・ 商店街の空き店舗を見ると、店舗に弟子が住んでいた部屋がある。商売を学んで別の場所で起業する。歴史的に見ても商店街は、元々学びの場だったと感じている。 ・ やるじゃん会誕生当時に中心となった方々の強い意志がなければ、このまちは終わっていたかもしれない。 ○WG メンバー ・ やるじゃん会はどのようにして始まったか。 ○協議会メンバー ・ 商工会議所や市が主導してさまざまな委員会を作り、今も商工会議所が事務局を担い推進してくれている。 ○協議会メンバー ・ やるじゃん会では、賑わいを取り戻そうとさまざまなイベントをしてきた。今は若い人たちがイベントから違う方向へシフトしていこうとしている。 ・ 他所では移住者が商店街で軋轢を起こすことがあるが、やるじゃん会のおかげで商店街の皆さんが新し	
--------	--	--

	く来た人たちを受け入れてくれているし、今とこれからを繋ごうという気持ちを持っている。	
3、1/21 キックオフイベントでの WG ごとのテーマ設定等について		
中心市街地と行政の関わり	○WG メンバー ・今回のこの協議会は、メンバーに移住者や若い人が多い。協議会のそういったメンバーが生活者として、この協議会を活用してやっていけるかがポイントだと思う。 ○WG メンバー ・中心市街地で行われていたことは、まちづくりであり人づくりであって、当主の世代がずれているお店同士が、次の世代をお互いにサポートし合うということがあった。 ○WG メンバー ・今までの行政の取組を振り返って、行政から見て中心市街地は救済すべきものなのか新陳代謝を進めるべきものなのか。 ○事務局 ・やるじゃん会の立ち上げ、いなっせ整備、創造館リノベーション、伊那まつり開催、高校駅伝のコース設定など、行政としても中心市街地に強い思いがあるのは確かである。 ○協議会メンバー ・総合計画にもまちなか再生という項目がある。私は中心市街地に來たから感じるが、市は色々やってくれている。 ○協議会メンバー ・しかし、お金を出して人の流れを促そうという取組は限界だと多分みんな感じている。やるじゃん会では、イベントをやって、いっぱい人に来てもらって、人の繋がりを作ろうという新しい価値にシフトしている。 ○WG メンバー ・中心市街地は元々買い物をするための場所だったから、人を集めるには買い物客を集めるという発想しかなかったと思う。 ・しかし、さきほどの流域治水の話でいくと、人工降雨で雨を降らせて水が集まればよいわけではなくて、その水によって生物が育ち、生物多様性が広がっていくことの方が大事である。 ・今までの中心市街地の歴史を聞いて、水が一気に流れるのではなくて、ゆっくり水が流れて、その中で	

キックオフイベントの設定	何かが生まれていくという流域治水の考え方は、これからのまちづくりの考え方に繋がると思った。 ○協議会メンバー ・伊那図書館の来館者は、100mしか離れていない商店街へ流れていない。賑わってはいるけれど生業や暮らしに繋がっていない。伊那北駅の乗降客にも同じことが言える。 ○WG メンバー ・松本市では、20 年前に大規模な改修で電柱を地中化したり、パルコ前を綺麗にした。その中で一番インパクトがあったのが、女鳥羽川で、水に着目して親水空間の改修を行い、市民が川に下りて遊べるようになった。その結果パルコだけでなく中町通りも賑わうようになった。好例であると思う。 ○WG メンバー ・今まで中心市街向けに、学生や住民に対して支援してきたことはあるか。 ○協議会メンバー ・伊那まち BASE に対する補助や伊那消防署のリノベーション(a111a)、旧上伊那図書館のリニューアル(創造館)などがある。今までも居場所や滞留する場所を作るための支援をしてきている。 ○WG メンバー ・2014 年～2015 年ころ、商工会議所が儲かるための勉強会というのを月1 回程度開催していた。夜な夜な集まってそれぞれの店主がウチはこんな取組で売り上げを伸ばしている等赤裸々な話を共有し合っていた。まちの歴史を知ることや、人との繋がりができてよい取組であった。 ○協議会メンバー ・私たちは、市民主体での対話の場を作るために集まっている。では、どういう人に集ってもらい、どういう問いを投げかけたら、前向きに盛り上がって話ができるかというところを決めていきたい。 ○WG メンバー ・「新しいまちづくり」の「新しい」とは何かとずっと疑問に思っている。アプローチが新しいということか。 ○協議会メンバー ・市が粛々と基本計画を作ったけれど、中身はどうしましようという今までのような話ではなく、「主役はあなたたち市民ですよ。要望、要求するだけでは	
---------------------	--	--

	なく、皆さん一緒にやりましょう。」という形が「新しい」ということ。 ○WG メンバー ・今まで暗黙の了解で賑わいを増やすということを引きずってきた。「これからは空洞化に対する賑わいではない。では何？」というのをこのワーキンググループの問いとすれば、広くいろいろな意見が聞けると思う。 ○WG メンバー ・流域治水がヒントになるのではないか。直線的な賑わいがこれまでの経済的な賑わいだとすると、曲線的な環境がこれからのまちの賑わいではないかというのは大きな問いかけになるのではないか。 ○協議会メンバー ・今伊那市に暮らしているみんなにとって、どんなまちがよいとか、どんな暮らしの場所が望まれているかということではないかと思う。 ・あなたはどのような暮らしをしたいか、あなたはどのような地域で暮らしたいかという問いがあって、そこに、みんなで共有したいイメージがある。 ・その共有したいイメージは流域だから1個じゃなくて重層的なものだよねというような問いができるとすごくフラットに対話できるのではないか。 ○WG メンバー ・流域治水の早くでなくて、ゆっくり流そうという考え方の中で、いろいろな人が、いろいろなことを発見して、いろいろなことが生まれていくのがまちである。そこに一緒に関わりたい人を集める場でよいのではないか。 ○協議会メンバー ・例えば高校生なら「まちなかでどんな風に毎日を過ごしたいのか」、「誰か知らない人と出会いたい」とか、「居心地がよい場所ができたらい」とか、そういったことが炙り出されるとよい。 ・その話に、私たちが共有したいものは何だろう、一緒にやりたいことは何だろうという対話ができたらよいと思う。 ○WG メンバー ・中心市街地の人、長谷高遠町の人、移住者、週末だけ伊那市に来る人、学生、農家、いろいろな人に来てもらって、それぞれ自分にとって中心市街地がどんな風になったらよいかを話してほしいので、いろいろな人に来てほしい。	
--	--	--

	○WG メンバー ・ 中心市街地には、歴史など他の地域にはない特異性がある。 ・ 今では、中心市街地を通らなくても生活することができるようになっていて。中心市街地に関わると付加価値が生まれるくらいにならないと関わるのがなくなってしまうのではないか。 ○WG メンバー ・ 他のまちから比べると、伊那市の中心市街地は個人の飲食店が多く、食文化は豊かだと思う。しかしなぜ、みんながうまくいっていないと思ってしまいかを考える必要がある。 ・ 日本全国と比べてどうか、しっかりと自己認知を共通して持ったほうがよい。 ○協議会メンバー ・ 緩やかに新陳代謝を繰り返していると言ったが、外から来る人は伊那の商店街は元気ですねと言ってくれる。 ○協議会メンバー ・ ここ 10 年間、面白いことが起こってきたけれど、本当はもっと起こってほしい、みんな起こしませんかという話なのかもしれない。 ・ 面白いことが起こったところで、それは別にワイワイ人がある状態を作るわけではないし、閉店していくお店もまだあるかもしれないけれど、もっとみんな楽しく暮らせるはずだよねということかもしれない。 ○WG メンバー ・ 「適疎」という言葉がある。いっぱい人がいた時代における商店街の在り方と、これからの商店街の在り方みたいなのはすごくよい問いになると思う。 ○WG メンバー ・ 今回は、私は今までこんなことをやってきたということを、話したい人に話してもらおうということが目的でよいのではないかと考えている。 ・ 問いとしては、中心市街地で「今までこんなことをやってきた」、「こんなことをやりたい」、「こんなことができる」の3つくらいを話す感じかと思う。そこから一つ解が見つかればよいし、全然違う方向だったねということになるかもしれない。 ○協議会メンバー ・ その3つの問いもよいし、例えば学生に「学校と家以外に地域で過ごしたいか」、「過ごしたいとした	
--	---	--

	らどんな場所で、どんな風に過ごしたいか」みたいなことも聞いてみたいから、学生にもたくさん来てもらいたい。 ・若者だけで話せるグループ分けをしてもいい。 ○WG メンバー ・これまでのまちづくりは賑わいを中心にやってきたという背景の説明をして、それに捉われず、それぞれの立場で、「どんなまちが暮らしやすいか」、「訪れたくなるか」といった問いになると思う。 ○協議会メンバー ・この協議会で最終的に望んでいることは、主体形成をすることである。「あなたにとってまちは何をしたい場所か」という問いが主にあればよいのではないか。 ○WG メンバー ・「これまで私はこんなことをやってきた」という過去の話をしてほしい人、「今こうしたい、これが欲しい」という現在の話をしてほしい人、「これからこうしていきたい」という未来の話をしてほしい人と、多分3種類の人がいると思うが、どこかにフォーカスしてしまうと、勝手に方向付けされているみたいな感じになるから、「過去現在未来の3つとも話に来てくれていいですよ」みたいな問いにするとバランスよく人が集まるのではないか。 ○協議会メンバー ・メインの問いがあった上で、サブタイトルとして、「今までやってきたこと」、「今やりたいこと」、「これから自分が過ごしたいまち」について話しましょうという説明が付けばよいのではないか。 ・どうしてもまちづくりというと、自分の外側の話として話してしまう。自分がどうしたいかということを感じさせるような問いであってほしいと思う。 ○WG メンバー ・立場が違う人たちの求めるものを擦り合わせるのは難しい。例えば、地元に住んでいる人、移住者、お金を出して実際に実行していく人、それぞれ目線が違う。 ・地元の高齢の方から話を引き出すには、過去のその方の経験の中で、ここは賑わいがあったとか、ここは楽しかった、祭りがよかったという話が引き出しやすい。	
--	---	--

	・具体的に引き出せれば、全部過去に戻すことはできないけれど、その過去の良かったものだけを抽出して未来に繋げるという話の流れはできると思う。 ・意見出しただけになってしまうと、ネガティブなことが多くなってしまう気がする。どうやってポジティブな方向に持っていけるかが大事だと思う。 ○協議会メンバー ・「あなたは中心市街地でどう過ごしたいか。」みたいな問いはネガティブではない。その問いの下に「あなたはこれまでどうしてきましたか」、「今何をしたいですか」、「これから何をしていきたいですか」という説明があるとよい。 ○WG メンバー ・中心市街地の情報や、中心市街地でこんなことをやっているということが、実はほとんど知られていないのではないか。 ・中心市街地の「現状」、「よいところ」、「悪いところ」、「どうやら賑わいづくりではないらしい」とか、「商業の話ではないまちづくり」という発信が随所であったほうがよいのではないか。 ・現状や、メッセージを発信することだけでも、中心市街地に関係ない人たちを考えさせていることになり、その過程すらもまちづくりリビングラボが始まっていると言ってよいのではないか。 ※全員で、キックオフイベントに来ていただきたい人を挙げ終了した。	大きな問い 「あなたは中心市街地でどう過ごしたいですか？」 小さな問い 「1、あなたはこれまで、中心市街地で何をしてきましたか？」 「2、あなたは今、中心市街地で何をしたいですか？」 「3、あなたはこれから、中心市街地で何をしていきたいですか」
--	---	--

■今後のスケジュール

- ・12月24日(火) 午後6時～ 市役所1階多目的ホール
ワーキンググループ全体会 + 各ワーキンググループ
- ・1月21日(火) 午後6時～ いなっせ6階ホール・ホワイエ
キックオフイベント